2014/12/3

詩と押韻について

Kin

１．はじめに

（１）目的

イ．「『今でも…ローセキは魔法の杖』研究会」において、「深い眠りに包まれて」の「詩の理解」を目指し、ひいては合唱曲としての同曲に対する理解を深めること。

ロ．合唱ないし合唱曲における「詩」の位置付けをどう考えればよいかの点、曲の「詩」への取り組み方をどう考えればよいかの点について、議論のたたき台を提供しようすることも目標。

（２）方法

イ．そもそも詩とは何であるかについて芸術哲学の見地から考察を試みる。

芸術としての詩の意味するところを明らかにする。詩と音楽との関係についても触れる。この点は、主にショーペンハウアーの哲学を参照する。

ロ．九鬼周造の日本詩の押韻論を参照し、詩の押韻についての理解を深める。

ハ．主に脚韻に焦点を当てて「深い眠りに包まれて」の詩に迫り、一端を解明することにトライする。なお、無伴奏男声合唱のための「カウボーイ・ポップ」の「ある日」についても分析を試みた。

（３）前置き

イ．図表中、引用箇所は、HGP ゴシック M で記載した。私見は、MS ゴシックで「コメント」という欄に記載している。

ロ．参照した文献、WEB サイトは末尾に掲げた。

２．合唱曲における詩とは？

（１）理解のために使用する枠組み（ショーペンハウアー哲学）

詩とはそもそもどのようなものであるか？

この点を理解するだけの目的にもショーペンハウアー哲学は有益である。

それに加え、ショーペンハウアー哲学における芸術論、音楽論は、極めて明晰である上にニーチェやワーグナーなどにも大きな影響を与えた思想として名高い。

ショーペンハウアーの詩論・音楽論およびそれらを包括する芸術論は、合唱曲における詩の位置付けを明晰に理解し、詩への取り組み方を考えるため枠組として非常に有益であると思われる。

そこで、主著「意志と表象としての世界」に展開されたその思想内容を紹介するとともに、合唱曲というものについてその枠組みを使って考えてみることとしたい。

なお、今回のこの取り組みは、いわば実験的なものである。固まっている見解として発表するものではない。今後この点についての考えも深め、様々な思想も参照し検討していきたいと思っている。

（２）芸術論

	物自体、イデア、芸術	コメント
意志と表象としての世界	第三十六節 あらゆる相対関係の外に独立して存在しているもの、それのみが正真正銘に世界の本質をなすところのもの、世界のさまざまな現象の中の真の内容、いかなる変化にも属さないため、永久に同じ真理をもって認識されるもの、一言でいえばイデア、物自体の、意志の直接的で適切な客体性であるところのイデア、これを考察するのはいったいいかなる認識の方法なのだろうか。	（１）イデア ショーペンハウアーの文脈でのイデアという用語を説明する。 ショーペンハウアーは、イデアを「物自体としての意志」の客観化・客体化したものと捉えている。 （２）物自体 物自体というのは、もともとカントの用語である。 われわれには、「時間」と「空間」という直観形式が備わっている。この「時間」、「空間」という形式を経ると、「現象」が現れ、われわれはこれを認識できる。 その直観形式を経る前の、「もの」そのものという意味で「物自体」という言葉を使っている。 カントは、物自体は直接認識することはできないとした。 （３）イデアとして客観化 物自体は認識できないが、物自体が客観化したイデアという形であれば、認識できる可能性が出てくる。
	それは芸術である。…芸術がイデアを再現していく場合の素材に応じて、それは造形芸術であったり、詩文芸であったり、音楽であったりするのであろう。が、芸術のただ一つの起源は、イデアの認識である。そして、芸術のただ一つの目標は、この認識の伝達ということに他ならない。	物自体、および物自体の客観化したイデアは、両者とも時間、空間、因果関係といった現象世界のものではない。そのため芸術という認識の方法によって、それを掴むのである。

（３）詩論

	詩・詩作について	コメント
意志と表象としての世界	第五十一節 詩もまた疑いもなくイデアを明白化すること、意志の客体化のある段階を明白化することを目ざしていて、詩人の心が生々しく鮮明にとらえたイデアを、詩を聴く者にも伝えるところに詩の目ざす狙いがあることは、われわれには疑いようのないことのように思う。― イデアはその本質からいっても直観的である。詩の中で直に言葉で伝えられたものは抽象概念に過ぎないとはいえ、したがってそこには明らかに、これら概念を代表として、詩を聴く者にこの人生のイデアをありありとこころに直観的に映じさせようという目的があるのである。そしてこのようなことは聴き手自身の想像力の助けがあって初めてできることなのである。 …詩にとって格別の補助手段となるのは音律 Rhythmus と押韻 Reim とである。それらが信じがたいほど強い効果を発揮することについては、次のような説明をするよりほかにわたしはいかなる説明のすべも知らない。すなわちわれわれの表象力は元来時間に結びついているものである。われわれの表象力は音律と押韻とによって、われわれの心が規則正しく反復される響きにいちいち反応し、いわば一緒に共鳴するような独自な特色を獲得するようになるのである。 こうして、音律と押韻とは、詩の朗読に快く耳を傾けさせることによって、ひとつには、われわれの注意をつなぎとめる接合剤の役目を果たしているのだが、さらにまた、われわれの心中に、あらゆる判断を待たずに朗読された詩に共鳴せずにはいられない盲目的感情が、音律と押韻によって生まれてくるというもうひとつの役割もあるのである。これによって朗読された詩は理由のいかんにまったく左右されない、ある種の強い説得力を獲得するにいたるであろう。 イデアを伝達するために詩の用いる素材はすなわち概念であるが、概念は普遍性を備えているために詩という分野が占めている範囲は極めて広いといえよう。 …人間は、その単なる容姿や顔つきの表情だけでは自分を言い表しているとはいえず、一連の行動やそれにともなう思想や情念によって自分を言い表すものなのであるから、人間を描くことは詩の主要対象であり、この点では他のいかなる芸術も詩と対等にわたり合うことはできない。	【詩の特徴】 ショーペンハウアーによって分析された詩の特徴を列挙すれば以下のとおり。 **①音律 Rhythmus と押韻 Reim** これらによって、聴き手の心は、規則正しく反復される響きと一緒に共鳴する。 **②概念** 詩は、概念を素材として構成する。 概念は、思想・情念などの人間の特徴を表現するのに最適。

（4）音楽論

	音楽について	コメント
意志と表象としての世界	第五十二節 音楽はほかのあらゆる芸術から全く切り離された独自なものである。音楽は、世界にある存在物のなんらかのイデアの模写や再現とは認められない。 …音楽は意志全体の直接の客観化であり、模写なのであって、音楽はこの直接という点にかけては世界それ自体と同じほどに（意志に対し）直接なのであり、いな、さらに多様に現象して個物の世界を形成しているあの数々のイデアと同じほどに（意志に対し）直接なのである。だからして音楽はけっしてほかの芸術のようにイデアの模写なのではない。それは意志それ自体の模写なのであり、イデアはこの意志の客体性でもあるのである。音楽の与える効果がほかの芸術の与える効果よりも格段に強力であり、またはるかにしみ入るように感動的であるというのもまさに音楽が意志それ自体の模写であるせいにほかならないのである。ほかの芸術は影について語っているだけだが、音楽は本質について語っている。	ショーペンハウアーは、芸術の中でも音楽だけを別格とする。 このショーペンハウアーの思想は、後のニーチェのいわゆる芸術家形而上学にも多大な影響を及ぼしている。 なお、左の引用中、「意志」とあるのは、「物自体としての意志」という意味である。

（5）合唱曲論の試み

合唱の定義	コメント（ショーペンハウアーの枠組みをあてはめ、解釈）		
歌曲や合唱曲は、 詩と音楽との複合芸術 多田武彦（著），「山田耕筰先生からの薫陶」，2014 年	芸術とは	イデアの伝達を目的とする認識の方法	【詩の位置付けについて】 詩は、概念によって構成されている。 それにとどまらず、詩は文学の一分野として、その時間性というものを内包している。 また、詩の持つ韻律により、音楽的なものをも内蔵している。 これらの詩によって明白化したイデアが示す世界そのものの直接的把握（物自体の模写）を目指したのが、合唱曲の音楽の部分ということになる。 また、当然のことであるが、詩の内容も言葉としてあるいはフレーズとして発音されることから、詩のもつ音や韻律そのものも音楽の一部を構成していると理解できる。 【まとめ】 詩が先にあり、後から詩に対して曲が付けられた合唱曲は、詩人が捉えたイデアの詩的表現に対し、作曲者がそのイデアの示す「物自体」を、音楽として表そうとした芸術作品であるといえる。
	詩とは	概念を用い、主として思想・情念などの人間の特徴をイデアとして捉え表現する。音律 Rhythmus と押韻 Reim を用い聴き手の心に、規則正しい反復される響きをもたらし、一緒に共鳴する	
	音楽とは	ほかの芸術がイデアの模写であるのに対し、音楽は、物自体としての意志それ自体の模写である。従って、他の芸術よりも「物自体としての意志」に近い。このため、音楽の与える効果がほかの芸術の与える効果よりも格段に強力なのである。	

３．九鬼周造の詩論

（１）詩について

	【文學の形而上学『文藝論』】八	コメント
九鬼周造	小説と戯曲とが客観的であるに対して詩は主観的である。詩といふ場合、ここではもちろん抒情詩を指してゐるのであるが、自己の心持ちがどうしても押さへきれないで溢れ出て来て初めて詩となるのである。本居宣長が「歌よむは物のあはれにたへぬ時のわざなり」と云つてゐるのもそのことである。 …現在に感動と直観とがあるとき詩が生まれるのである。詩は現在の感動と直観とを端的に表現するものでなければならぬ。…詩は時間的には現在の一点に集注してゐると言つてよい。投網を引き上げるとき、拡がった網が龍頭の一点に集注して来るやうに、すべてが現在という中心に集つて来ることによつて詩が成立するのである。…詩に表現される感情は押へ切れないで現在の瞬間から鬱勃としてほとばしり出てくるのである。 …詩の時間的性格は現在的であると云つて差支ないが、なほまた詩の現在は謂はゆる「永遠の今」であると見ることもできる。永遠の深みを有つた現在が詩の形式的規定の上にあらはれてゐる。詩のリズムの反復といふことは現在が永遠に繰り返すことである。例へば、五音七音五音七音五音七音……→　現在が限りなく繰り返すことは、現在が永遠の深みを有つてゐることである。リズムのみならず詩が韻を踏むといふことも同様である。 …現在が深みを有つように繰り返すのである。多少長い詩形にあつても、すべてが現在の一点に集注するように、技術上リズムとか韻とか行とか畳句とかまたは反歌といふやうなものを用いて飽くまでも繰り返すのである。長い詩形をそれによつて謂はば短縮するのである。詩のさふいふ外形上の技術は詩を同じ現在の場所に止まらせて足踏みをさせてゐるやうなものである。詩を永遠の今の現在の無限な一瞬間に集注させようとするのである。 文學の中で詩では特に現在性が浮き出てゐる。藝術としての一般的な現在性の上に更に詩としての現在性が加わつてゐる。詩の時間性は現在的現在といふことができる。さうして、過去に重点のある小説が學問に接近し、未来に重点のある戯曲が道徳に接近してゐるのに対して、現在に重点のある詩は特に藝術的性格の顕著な文學であると言って差し支えないであらう。	九鬼哲学にとって、詩論は、いわゆる哲学の思索対象領域の一つとして展開されている訳ではなく、むしろそれは九鬼哲学の肝として論じられる。ただ、ここではあくまで詩の概念理解に役立つ範囲で解説し、その他の部分の詳述を控える。 九鬼の詩論の特徴を整理・列挙すると以下のとおり。 **①芸術の特質** 学問は過去というものを重視する。道徳は未来というものを重視する。これに対して芸術が重視するのは、現在である。 **②詩の特質** 詩が生まれるのは、現在に感動が生まれたときである。従って、詩は、現在を重視する芸術の中でも、特に現在というものに立脚して表現する芸術である。 **③韻律の意味** リズム、韻の反復は、現在が「永遠に繰り返すこと」を意味する。 畳句や反歌などの詩の技術も同様である。 **④偶然** 韻律は、遊戯として成立してくるもの。それは偶然性をその契機としている。その偶然による詩の成立は、人間そのもの在り方が、言語という形を取って実現しているものとして捉えられる。 **⑤詩の現在** 詩の現在とは、「永遠の今」を指している。詳しくは（２）九鬼周造の時間論を参照。

（２）九鬼周造の時間論

	【文學の形而上学『文藝論』】五	特徴		コメント
過去	過去に重心を置くのは船に乗って川を下るようなものである。川上から川下へ船は流れて行く。	過去は、「学問」の時間的性格 水平的 動的		【詩と時間論】 九鬼にとって、詩論と時間論は切り離せないものである。 九鬼は、芸術としての詩文芸の本質を「永遠の今」の把握・表現であると捉え、それによって、人間が時間を超越すると見ている。 【詩と偶然】 九鬼は、詩の特質を、言語の偶然的関係に基づく構成的遊戯性にあると捉える。 そして、偶然の遊戯の中に成立する詩の韻律の反復は、人間が時間を永遠化し表現するものと考えている。
未来	未来に重心を置くのは曳船をして川を遡るようなものである。川というものの特色は川下から出発して川上へ遡り得るという点にあると考えられる。	未来は、「道徳」の時間的性格 水平的 動的		
現在	現在に重心を置くのは川に面して直前を見ているようなものである。 そこに新しいものが生れては死に、死んでは生れる。今という現在が源泉となる。 なおまた川を見て、この水が海水に入ってそれが水蒸気となって天に昇り、更に雨となって地に下って山をうるおし、それが谷間から次第にもとの川に流れて来るというように考えることもできる。すなわち今見ているこの川の水は永遠に循環している水であり、従って今見ている水は無限の深い背景を有ったものだというように考える。 そうすれば川の水は永遠の今の象徴と見られることになる。	現在は、「芸術」の時間的性格（静的・偶然性）	芸術は部分的、孤在的に自己を充実し、完成する。芸術品は一つの完成態として謂はゆる「小宇宙的構造」に於て他との関聯から切り離される。さうして全体として独立に直観される。そこに芸術そのものの構造性格が偶然的なところがあるのである。芸術は謂はば偶然性を終局の形としてゐるのである。…芸術は現前の偶然性に於て自己を観照する「現在的」文化形態である。 『偶然性の問題』	
			真の芸術家は、永遠の無限すなわち美をしっかりを把握する。彼は美を我が物とするのである。それによって、かつ、それによってのみ、芸術家は人間存在の教師となる。彼は時間からの解放を教え、美にほかならぬ永遠において生きることを教える。 ポンティニー講演「日本芸術における『無限』の表現」	

４．九鬼周造の押韻論

（１）「日本詩の押韻」『文芸論』（1942 年）の内容を主として図表化

	各節	内容	補足
一	押韻の芸術的価値	詩の形式： リズムとしての「律」 音色としての「韻」 韻律を具備「律格詩」 それのない「自由詩」	ポオル・ヴアレリイは詩は『言語の運の純粹な體系』であると云ひ、また押韻の有する『哲學的の美』を論いてゐる。彼が「純粹」といひ「哲學的」といふのは言語の音響上の偶然的關係に基づく遊戯を指してゐるのである。いはゆる偶然に對して一種の哲學的驚異を感じ得ない者は押韻の美を味得することは出來ない。淨世の戀の不思議な運命に前世で一體であつた姿を想起しようとする形而上的要求を知らない者は押韻の本質を會得することは出來ない。押韻の遊戯は詩を自由藝術の自由性にまで高めると共に、現存在の實存性を言語に附與し、邂逅の瞬間において離接肢の多義性に一義的決定を齎すものである ハイデッガー【存在と時間】第二編第一章 現存在の「本質」はそれの実存にある。
二	不定音詩と押韻	不定音詩（狭義の自由詩）にも韻・律の強調を見ることができる	虎　　（佐藤惣之助） とめ子の眉根にはピカリと新月の棚がある とめ予の口許にはキレイな髯が生へてゐる とめ子の水着の肌には圓い縞馬が動いてゐる 今日はとめ子と泳いでやらうと思つてゐる 海中でとめ子と戰爭しようと思つてゐる 夜は健全なとめ子と寢ようと思つてゐる 新日本の母體を得ようと思つてゐる とめ子と寢たら浪になるだらうと思つてゐる 強靭にうねるだらうと思つてゐる 喜びの牙を鳴らすだらうと思つてゐる 若い虎になるだらうと思つてゐる 大きな月が出るだらうと思つてゐる
三	日本詩の押韻可能性 積極的理由	日本では長歌、旋頭歌、今様などに豊富に押韻が見られる	【万葉集】　柿本人麻呂 浦なしと人こそ見らめ 潟なしと人こそ見らめ よしゑやし浦はなくとも よしゑやし潟はなくとも
四	日本詩の押韻可能性 消極的理由、（イ）文字	日本詩の押韻可能性を否定する理由に対する反論	から鮭も空也の痩も寒の中　　（芭蕉） 「乾鮭」と「空也の痩」と「寒の中」とは内容上の一致をもつてゐるが、韻の上でも三者の一致が表はされてゐる。Kara kuya kan の頭韻 K が意識されてゐたらう
五	（ロ）音声学的性格		
六	（ハ）文の構造		
七	韻の量	（２）参照	（２）参照
八	韻の質	「不完全韻」 応和する母音の量や性質が異なっているために、不完全な押韻となっている場合。すべての不完全韻は必ずしも美的価値の欠乏を意味するわけではない。	【万葉集】　詠み人知らず 夕暮にうち越え行けば　ba 瀧の上のさくらの花は　ha
九	韻の形態	「ソネット」 音韻の美を最も効果的に発揮 日本詩に押韻が可能 ↓ 押韻を根本義とするソネット ↓ 日本に於てもいのちを有つ 十四行詩と見るべきものは万葉の長歌にはいくらもある	【万葉集】　柿本人麻呂 やすみしし　我が大王の　① きこしをす　天の下に　② 国はしも　多(さは)にあれども　③ 山川の　清き河内と　④ 御心を　吉野の国の　⑤ 花散らふ　秋津の野辺に　⑥ 宮柱　太敷き座せば　⑦ ももしきの　大宮人は　⑧ 舟並(な)めて　朝川渡り　⑨ 舟競(ふなきほ)ひ　夕川渡る　⑩ この川の　絶ゆることなく　⑪ この山の　いや高からし　⑫ 水激(みなそそ)く　滝の宮処は　⑬ 見れど飽かぬかも　⑭

十	押韻の日本性と世界性	律と韻とは詩の音樂的樣相である。音樂が心のおのつからな流れとして世界的の言葉であると同樣の意味で、詩の形態も世界的の言葉である。民族の特殊性は各々の國語に特殊的規定を與へて、詩の音樂的樣相を更に樣相化するのである。もとより眞に押韻の美を味得するには『とらへたき聲ばかり見る葦間かな』といふやうな、音に對する切なる憧憬をもたなければならない。また天體の運行に宇宙の音樂を聽いた靈敏な心耳と、衣ずれの微韻にも人知れず陶醉を投げる尖鏡な感覺とをもたなければならない。しかしながら押韻によつて開かるべき言語の音樂的實庫は無尽蔵である。韻の世界は拘束の彼岸に夢のやうに美しく浮かんでゐる偶然と自由との境地である。	【万葉集】　詠み人知らず はしだてのくらはし山に 立てる白雲 見まく欲（ほ）り我がするなべに 立てる白雲 【万葉集】　詠み人知らず かすがなる三笠の山に 月のふね出づ みやびをの飲む酒杯に 影に見えつつ 【旋頭歌】 和歌の一形式。五七七を２回繰り返した６句からなる。上三句と下三句とで詠み手の立場がことなる歌が多い。頭句（第一句）を再び旋（めぐ）らすことから、旋頭歌と呼ばれる。五七七の片歌を２人で唱和または問答したことから発生したと考えられている。(Wikipedia 参照)
十一	作例	「様々な具体的作例」 平行直線の公理、kori 望み通り dori 証明出来た？ ta いや、基本要求を撤回した？ ta （中略） 二つの平行線は交はらぬがことわり、wari 不思議ぢやないか平行線の交り、 wari これが偶然性、sei 混沌が孕んだ金星、 sei 因果の波の寄するがまま mama 二人が拾った真珠玉。dama	

（２）．韻の量について

		例	備考	コメント
一音綴り	単純韻	ますらをの手絡が浦に i 海未通女鱒焼くけぶり i	日本の詩韻の量としては、單純韻は要求を充すことが出來ない	九鬼は、詩の本質論を踏まえ、そこからさらに押韻論を展開した。従って、九鬼の押韻論は、本来、詩作品の本質を踏まえて感得、観照あるいは詩作するためにある。 ただ、今回あえて強調したいのは、九鬼のこの韻の量についての分析枠組みは、合唱曲の詩を読むときのツールとしても有用ということである。 特に、詩の内容にわたる解釈論は十人十色である。 合唱は複数人で行うものであることから、詩の内容の解釈論も区々となりやすい。認識のための共通の手法がなければ、それはどこまでも区々のものが茫々と広がっていくことにもなる。 そこで、詩のリズム形式や、畳句（文章や詩で、同一の句を重ねて用いる手法）の用いられ方、そして押韻のなされ方などの客観的特徴に着目して分析するという方法が考えられる。 これにより、詩の表現意図について、ある種の客観性を帯びた手法をもって、ある程度の範囲までは、皆で理解なり解釈なりを確定していくことが可能となる。 つまり、一定範囲迄は、客観的な特徴面に依拠して、共通認識を形成していくことができる。 （もちろん、言語内容の組み合わせによって、詩の表現の意味内容そのものまで完全に共通認識の形成が可能となるという意味ではないし、それを目指すものでもない） 韻の量の分析枠組みも、そうした目的の下に用いて、合唱曲の詩を読んでみることをお勧めしたい。
	拡充単純韻	はるばろに家をおもひ川で　de 負征箭のそよと鳴るまで de	ある程度は韻の効果を表す	
二音綴り	二重韻	老いぬれどみどりの衣 omo ぬぎ捨てむ春はいつとも omo	典型的のものとして立てられなければならない	
	拡充二十韻	まつしまや maya 雄島の苫屋 maya	豐富な韻として尊重すべきもの	

５．韻律分析の合唱曲への具体的適用

（１）柴野利彦詩「今でも…ローセキは魔法の杖」（一部）について

炎のように	脚韻	コメント	深い眠りに包まれて	脚韻	コメント
いつの間にか	nika	【畳句的な表現】	1、深い眠り**に包まれた遠い日**	ihi	【畳句】
不思議な闇に包まれた遠い日	ihi	「いつの間にか」	だれにも邪魔**されない**	nai	「愛だけを　氷が溶ける
……		「遠い日」	だれも来た**ことのない**	nai	ほどに熱く」
小さな胸は秘密でいっぱい	pai		だれも知ら**ない場所で**	de	「しっかり胸に抱いて 」
小さな頭は謎でいっぱい	pai	【押韻】	ぐっす**り眠っている**	iru	
……		Pai、nai、siku な			【畳句的な表現】
太陽は時々にしか笑ってくれない	nai	どの脚韻が豊富に	ほのかな光**に包まれた遠い日**	ihi	「包まれた遠い日」
		なされている。	だれにも脅**されない**	nai	「だれ…ない」
地面に描いた絵も抜け出してくれない	nai		だれも乱す**ことのない**	nai	「…眠っている」
			だれも触れ**ない場所で**	de	
（中略）			ひっそ**り眠っている**	iru	【押韻】
					段落単位で脚韻が繰り返
炎のようにめまぐるしく	siku		*晴れやかな夏の陽射し*	si	されていると見ることが
雷のように激しく	siku		*まばゆくきらめき　海に突き刺す*	su	できる
周りは姿を変える	eru		*透明なガラスのケースに収められ*	re	
変わる　変わる　変わる	waru		*どんどん沈んでゆく*	ku	「きっと眩しい光が差す」
					以降の段落は、脚韻の押韻
隠れる場所がない	nai		愛だけを　氷が溶けるほどに熱く	tuku	を意識しているようには
もうお母さんは他人	nin		しっかり胸に抱いて	ite	見えない。
誰もかばってくれない	nai				あえて脚韻を施さない点
			2、澄んだ音色**に包まれた遠い日**	ihi	に、かえって最後の方の段
見たことも　感じたこともない	nai				落では形式の繰り返しに
裏切りの高笑いが聞こえる	eru		（中略）		とどまらない表現をとり、
					そこに何らかの表現意図
いつの間にか	nika		愛だけを　氷が溶けるほどに熱く	tuku	を込めたものではないか
逆立ちして歩いた　遠い日	ihi		しっかり胸に抱いて	ite	という推測も成り立つと
……					思われる。
			きっと眩しい光が差す	su	
（以下、略）			きっと春が　ささやく	ku	
			さなぎは　深い沈黙を破り	ri	
			ある日　突然	zen	
			羽を拡げた世界が開けるだろう	rou	
			きっと　きっと……	to	

（２）．寺山修司詩「ある日」について

ある日（下線および（i）の付加は筆者）	コメント	
母のない子に　本がある	7　5	畳句的表現 「…のない子に　…がある」
本のない子に　…		7・5 を続ける形式 【長歌】 和歌の形式。 5・7、5・7、…、5・7、7 の形式。5・7 を 3 回以上繰り返し、最後を 7 とする。 Ex.　山部赤人　「万葉集」 天地の　別れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は
（中略）		
恋（i）のない子に　何（i）がある？	7　5	
ひまわり（i）咲いた	7	【今様】 今様（いまよう）は、日本の歌曲の一形式。歌詞が、7、5、7、5、7、5、7、5 で 1 コーラスを構成するのが特徴。(Wikipedia 参照) Ex.　作詞者不詳「われは海の子」 我は海の子白浪の　さわぐいそべの松原に　煙たなびくとまやこそ　我がなつかしき住家なれ
日（i）が暮れた	5	
恋（i）のない子に　何（i）がある？	7　5	
		言葉 母×1 回　　本、海、旅、何×2 回　　恋×3 回 7・5 形式を繰り返し、言葉自体も連続がある強固な反復が特徴。

≪参考文献・WEB サイト≫

［2 について］
・ショーペンハウアー（著），西尾幹二（訳），「意志と表象としての世界Ⅱ」，中央公論新社 ，2004 年
・プラトーン（著），森進一（訳），「饗宴」，新潮社，1968 年
・プラトン（著），藤沢令夫（訳），「パイドロス」，岩波書店，1967 年
・多田武彦〈公認サイト〉～山田耕筰先生からの薫陶～
http://www.ric.hi-ho.ne.jp/neo-rkato/yaro/yamada_kosaku_no_kunto.html

［3、4 について］
・天野貞祐，澤瀉久敬，佐藤明雄（編），「九鬼周造全集第四巻　文芸論」，岩波書店，2011 年
・天野貞祐，澤瀉久敬，佐藤明雄（編），「九鬼周造全集第五巻　をりにふれて　押韻論」，岩波書店，2011 年
・九鬼周造（著），「偶然性の問題」，岩波書店，2012 年
・九鬼周造（著），田中久文（編），「九鬼周造エッセンス」，こぶし書房，2001 年
・田中久文（著），「九鬼周造」，ペリカン社，2001 年
・古川雄嗣（著），「九鬼周造の唯美主義哲学–時間論と芸術・文芸論–」，『人文学の正午 No. 1』，58-75，2010 年
・大東俊一（著），「九鬼周造の押韻論」，『法政大学教養部紀要　人文科学編』，27-51，1996 年
・木岡伸夫（著），「九鬼周造とベルクソン ： 出会いの意義」，人文学論集，119-137，1996 年
・ハイデッガー（著），細谷貞雄（訳），「存在と時間（上）」，筑摩書房，1994 年

［5 について］
・「カイエ」～柴野利彦の日記コーナー　バックナンバー　2004 年
http://www.na.rim.or.jp/~tshibano/nikki2004.html
・寺山 修司（著），「寺山修司少女詩集」，角川書店，2005 年
・佐佐木信綱（編），「新訓万葉集 新訂 改版 上巻」，岩波書店，1950 年

以上